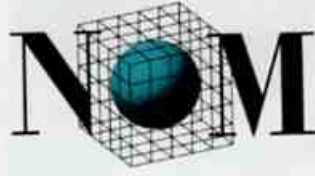


新潟県立近代美術館便り

# 雪椿通信



第6号

1996.4

# 平成7年度 新収蔵品

## 《世界の美術》

### 版画

- ◆アルブレヒト・デューラー  
《ウルリッヒ・  
ファルンビューラーの肖像》  
1522年（1620年頃の刷り）  
木版画、キアロスケーロ

キアロスケーロ木版とは、数枚の版木を重ね刷りすることによって立体的な効果が得られる木版画。ウルリッヒ・ファルンビューラーはデューラーの友人で、帝室顧問兼書記長官を勤めるかたわらエラスムス等とも交友のあった人文主義者です。

この作品は1620年頃にアムステルダムで刷られたもの。この頃には版木に傷みが生じ、それを補うために2つの版を新たに重ねてキアロスケーロとして蘇ったものです。

- ◆ヴェンツェスラウス・ホラー  
《デューラー26歳の自画像》  
1645年 エングレービング

デューラーの1498年作の《自画像》（プラド美術館蔵）を模刻したもの。原画の余白の最下部にはラテン語の銘があり、制作年・出版地が記されています。デューラーの原画と一部で異なる描写があるのは、模作の模刻であるからともいわれています。



（鳥＝人頭）

### 工芸

- ◆チェスワフ・ズベール  
《V.I.P.》  
1993年 光学ガラス、油彩

### 彫刻

- ◆マックス・エルンスト  
《鳥＝人頭》  
1934/35年（1992年鑄造）ブロンズ

エルンストは1934年の夏のバカンスをジャコモメッティと共に過ごし、彫刻へ関心を寄せました。この年から翌年にかけての冬期に制作された8点の彫刻作品のひとつです。

「鳥」をモチーフとしながらも、翼をひろげた鳥とも人の顔とも受け取れ、「図と地」の関係が自在に変転します。イメージの重層化の試みとともに、エルンストのプリミティヴ美術への関心もみられます。

## 《資料》

### 版画

- ◆ヤーコボ・デ・バルバリ  
《ヴィネツィア鳥獣図》  
1962年 紙

この資料は、平成6年度当館に収蔵されたヤーコボ・デバルバリの《ヴィネツィア鳥獣図》（第3版）の実物大の複製です。この複製は第1版からとられており、オリジナルに近いので、第3版の原作との比較研究が可能となります。

## 《日本の美術》

### 日本画

- ◆加山又造 《白い華》  
1995年 紙本彩色
- ◆安田靉彦 《佐久良比東》  
1939年 絹本彩色



（佐久良比東）

### 洋画

- ◆村井正誠 《ものうり》  
1958年 油彩、キャンバス

### 写真

- ◆濱谷浩 《裏日本》より18点  
《學藝諸家》より16点  
その他6点  
計40点  
モノクロームプリント

## 《新潟の美術》

### 日本画

- ◆中島萬木 《長岡悠久山の松林》  
1971年 二曲一双屏風
- ◆中島萬木 《奥三面の山の嶺》  
1971年 二曲一双屏風

2点とも昭和47年昭和天皇が植樹祭に来県のおり、新潟県民会館の控えの間に飾られた作品です。

### 洋画

- ◆佐藤哲三 《瓦焼場風景》  
1928年 油彩、キャンバス
- ◆佐藤昭平 《椅子》  
1977年 油彩、キャンバス
- ◆佐藤昭平  
《男と女／何を望むか》  
1977年 油彩、キャンバス

- ◆佐藤哲三 《越後の秋》  
1937年 油彩、キャンバス



（越後の秋）

# ふくよかな美の創造 ポテロ展 4月13日(土)~5月19日(日)

## 「静かな人物たちvs生々しい静物たち」

ポテロが最初に日本で紹介された60年代末には、もうその〈ふとっちょスタイル〉は確立されていた。まるまるとよくこえた人物や静物を見ていると心底楽しくなってくる。しかし、ただの素朴派とは少し違うことに、大抵の観客たちは気付いていたようだ。笑いを誘われたあとで、やがてもの思いにふけらないわけにいかなくなるのである。このあとけなくかわいい画面の奥には、何か計り知れないほどの深い静寂や寂知があるのではないだろうか、と。

たとえば絵の中の太った紳士、太ったカトリックの司祭、太った子供たちは、永遠の自己充足にひたっていて、まるでこちらに鏡みたいなものがあるように静かである。何を考えているのか、外からはわからない。彼らとしばらく向き合っていると不安になると、ある詩人が告白している。そして、その印象を強めているのは人物以外の要素である。ふんだんに描かれたバナナや西瓜や梨などの果物は、〈肥ふとって、爛熟の極みにある〉と形容される。果物にかぎらず、窓から見える屋根のつらなり、アンデスの山々、室内の電灯等のすべてが、ポテロの世界では存在を主張する生き物なのである。一枚の静物画に表された半分に切られたオレンジ、たべかけのバナナ、使われたばかりのナイフ、赤い切り口を開いた西瓜、半分開きかけの引出しは、人間の唇や手の接触を、実際の唇や手を描く以上に生々しく観る者に感じさせる。

また、ある家族の肖像画の中で、人物はあたかも古代の絵画や彫像のように、不自然に固いポーズで描かれている。母親に抱かれた女の子はお人形のようなものである。一方、淡い水色の空を落下している林檎たちは、〈舞いおりて〉くるのであり、地面にころがったかじりかけの林檎は、かじられたことをく語って〉いる。一見普通の肖像画であるが、よく見ると人物たちの方が無生物的であり、静物は逆に生物的に描かれていることがわかる。



(家族) 1989年

現実や絵画において、人間の心理は絶えず重要なテーマとして扱われ、〈もの〉は、半永久的に周縁部にとどまり続けている。しかし、もしそれが思い込みにすぎず、こんなふうに進さまの現象が起こったら、私たちの日常の経験はどのように感じられるだろうか。ポテロの絵の不思議な魅力は、ひとつにはこんな素朴な問いかけを画面の内に潜ませているところからくるのかも知れない。

本展に出品される絵画の中には、同様の価値転換が人間と動物、男と女の間にあてはまる奇妙な関係を表現した作品がいくつも見つけられる。また、大人に比べて子供が極端に小さく、建物より人の方が大きいという尺度転換の手法が用いられていることもある。

このように常識による見方や規範をこえてしまうポテロの芸術は、その造形の面白さを楽しむのみにとどまらない。かじりかけの林檎と蛇のモチーフに象徴されるように、何らかの風刺や批判が意図されているのではないかと、と思われる作品もある。ただ、作家自身は自分の作品を社会的コメントではなく、少しばかりユーモアが入ることがあるのだと言う。それは観客を芸術作品に招き入れる小さな扉であり、芸術家にとっては人々との対話を始めるひとつの方法であると。ポテロの作品は、今日ではあまりにも少なくなってしまう、芸術家と観客の間のコミュニケーションを促しているのである。

(美術学芸員 平石昌子)



(西瓜のある静物) 1994年

# エルミタージュ美術館特別名品展—神と人間—

8月1日(木)~10月17日(木)

世界地図をご覧になるとわかるように、バルト海に面したところで、最早北極圏にも近い北緯60度の線を超えようとする位置に、ロシア連邦第二の都市サンクト・ペテルブルクがあります。ソヴィエト時代は革命の主導者レーニンに因んでレニングラードと呼ばれていました。その港湾都市の歴史はさほど長いものではありません。ロシアの近代化を推進するため、新たに西欧に向けての窓口を求めたピョートル大帝によって遷都が計画され、新たに建設されたのです。着手されたのは1703年のことで、10年後には完成をみました。そして、ピョートル大帝の守護聖人である聖ペテロに因み、その都であるという意味で、サンクト・ペテルブルクと名付けられたのでした。以来ロマノフ家がロシア帝国を支配していたおおよそ二百年間にわたり、帝国の首都として、政治の中心であり、文化の表舞台であり続けたのでした。その都市にあって、現在、年間300万人以上の人々を世界中から集めている美の殿堂があります。それが、エルミタージュ美術館なのです。

「エルミタージュ」の名をご存じの方は多いことでしょう。幸いにも、ここ最近では国内で展覧会が開催されることが何度もあり、日本にいながらにしてその名品に親しむ機会にも恵まれています。しかし、フランス

のルーヴル美術館、イギリスの大英博物館、アメリカ合衆国のメトロポリタン美術館などと比べて優るとも劣らないこの世界屈指の大美術館については、名前ばかりが先行し、実際のところはよく知られていないのではないのでしょうか。簡単にその概要を紹介すると、エルミタージュ美術館は230年を超える歴史を持ち、270万点以上に及ぶ所蔵品を有し、その一部が350余りを数える展示室に飾られているのです。これだけでも十分驚嘆に値しますが、それら館内の展示室すべてを見て回るためには、20キロ以上は歩く覚悟をしなければならぬと聞かされると、この美術館が途轍もなく巨大なものであるということが実感できるでしょう。

もちろん、最初からこのような大規模の美術館が建設されたわけではありません。異なる時期に次々と建てられていった四つの建物が集合し、さらに一つの劇場が附属して現在のエルミタージュ美術館は構成されているのです。それらは「冬宮」、「小エルミタージュ」、「旧エルミタージュ」、「新エルミタージュ」、そして「エルミタージュ劇場」と呼ばれています。

まず最も大きく壮麗なのが「冬宮」です。ピョートル大帝時代に建てられ、数度の改築で現在の見事な姿と

なりました。1917年の革命までは実際に皇帝の宮殿であり、美術館として用いられるようになったのはそれ以降のことです。そして、その隣にあるのが「小エルミタージュ」です。エカテリーナ二世が、公務から離れごく親しい者たちだけで私的に楽しむ場所として建てさせたものです。当時は宮殿の側に「エルミタージュ」（フランス語で「隠者の庵」を意味します）と呼ばれる私的な空間を造ることが流行していました。芸術文化を愛した女帝は1764年にプロシアの大商人より225点の絵画作品を手に入れます。これが蒐集の発端となり、美術館の起源となったのです。次いで、「旧エルミタージュ」。増え続ける蒐集品のために増築され、当初は既にあった「小エルミタージュ」と区別するために「大エルミタージュ」と呼ばれていました。そして、さらに1837年に加わったのが「新エルミタージュ」です。これら四つの建築が現在のエルミタージュ美術館を構成しているのです。

ロシアの宮廷文化の歴史を負ったこれらの美しく特徴的な館内に、様々な時代、広範な地域にわたって展開してきた人類の文化遺産が余すところなく網羅され、展示されています。それらの実際の作品によって壮大な世界文化史をたどることができるといえる意味では、単なる「美術館」



ノアコド派のイコン（聖ニコラス）13世紀末~14世紀初頭



ルーカス・クラナッハ（聖母子）1530年頃



スキタイの美術品（戦馬乗車彫刻）紀元前4世紀初頭



というよりは、むしろ「博物館」と呼ばれるほうが相応しいのでしょうし、その内容を正確に伝えることができるのかもしれませんが。これら多岐にわたる諸種の所蔵品は、エルミタージュ美術館では六つの部分に分類されて収蔵され、研究されています。その六つとは、考古学的な遺物を取めた原始文化史部門、古代ギリシア・ローマ美術部門、中近東から極東まで幅広く扱う東洋美術部門、西洋美術部門、自国の美術・工芸品を収蔵するロシア文化史部門、そして、貨幣部門の、以上6部門です。

この多様さは、主に西洋美術の名品をとおしてエルミタージュ美術館を思い描いておりますと、意外に感ずるかも知れません。例えばレンブラント、あるいはマティスといった名前に代表されるような西洋美術の名作は確かにエルミタージュ美術館の顔ではありますが、しかし、それだけが総てなのではなく、むしろ大博物館としてのエルミタージュ美術館にとっては、その一部でしかないのです。



敦煌の仏教美術《菩薩》現藏所

そこで、今回の展覧会を計画するにあたっては、多彩な所蔵品を誇るエルミタージュ美術館本来の姿を、各部門の粋を選びすぐることによって凝縮させて日本でも見せることができなだろうかと考えました。そうなるとう当然のことながら出品される作品は多種多様なものとなります。しかし、作品の水準の高さに依存し、単なる名品展で終わらせないためにも統一した視点を持った優れた内容が求められました。そのような課題の中で、作品選択の基準に「神と人間」という主題が考えられました。神的存在はどのような文化においても存在しているものですし、そのような存在を畏敬し、崇拝し、賛美したりする人間の行為が、芸術作品を産み出す際の大きな原動力のひとつとなっているからです。このような困難な提案に対して、エルミタージュ美術館からは快く賛同が得られました。そして、貨幣部門を除く5部門からの出品協力というこれまでにない素晴らしいかたちで展覧会に結実したのです。

ただし、本展は単純に宗教美術を取り上げた展覧会ではありません。この「神と人間」という主題は、各部門の各作品ごとに緩やかに捉えられています。表現方法は決して一様ではなく、ある作品では祈念や憧憬の対象として真正面から取り上げられているのを見ることができでしょうし、また、別の場合では背後にさり気なく潜んでいるのを探り出すことも可能なのです。

それでは、最後にひとつだけ作品を紹介しておきましょう。古代ギリシア・ローマ美術部門に、エルミタージュ美術館の誇る至宝のひとつ《ゴンザーガ家のカメオ》があります。紀元前3世紀の宝飾品で、エジプト王プトレマイオス2世とその王妃アルシノエの横顔が縞瑪瑙に巧み

に彫られ、パルテノンに祀られる神々のように理想化されて表現されています。これは、エルミタージュ美術館のピオトロフスキー館長をして、この1点のみでも展覧会が構成できるとまで言わしめた秘蔵の逸品なのです。加えて、西欧諸侯の間を転々としたまばゆいばかりの来歴が作品に一層の彩りを添えています。元々は作品名の由来となったイタリアの貴族マントヴァ侯が所有していました。1630年にそのゴンザーガ家を離れてプラハの宮廷に移り、1648年にはスウェーデンのクリスティーナ女王の手に渡り、1689年から1794年まではローマの名家にあり、それからヴァチカンの法王ピウス6世の蒐集品となった後、ナポレオン妻のジョセフィーヌ王妃に愛でられたのでした。エルミタージュ美術館に購入されたのは、1814年のことです。

何もこの作品1点によって本展を代表させるつもりはありません。総点数にして約130点を数えるこのような名品の数々が会場に並ぶ予定です。会場にお越しになり、「神」、「人間」、そして、両者の関わりを巡る主題が様々に変奏されているのを、エルミタージュ美術館の貴重な作品をとおしてご覧いただきたいと思います。

(美術学芸員 桐原 浩)



《ゴンザーガ家のカメオ》紀元前3世紀

# 平成8年度の催し

## 企画展

### ■4月13日(出)～5月19日(日) ふくよかな美の創造 ポテロ展

南米コロンビア出身の画家フェルナンド・ポテロは、対象をふくよかに描く独特のスタイルで知られ、欧米でも高い評価を受けています。本展は、豊満な人間像や静物など油彩、素描、彫刻から計100点の作品を紹介します。

### ■8月1日(休)～10月17日(休) エルミタージュ美術館特別名品展 一神と人間一

エルミタージュ美術館は、ロシアのサンクト・ペテルブルグにある世界有数の美術館で、所蔵品は270万点を上回ります。本展では、原始文化史部門、古代ギリシア・ローマ部門、東洋美術部門、ロシア文化史部門、西洋美術部門からそれぞれ作品を選び、約130点を紹介します。出品される作品の多くは日本で初公開です。

### ■11月1日(金)～12月15日(日) 戦後の書・その一変相 江口草玄(仮称)

柏崎出身の江口草玄は戦後、書の再生を美術との総合のなかに求めますが、次第に書の独自性が自明のものとなり、「ことばの姿」であることを見出だすにいたります。本展では、江口草玄のこれまでの作品と、1950年代の関連美術作品を展示し、模索の跡を辿ります。

### ■平成9年 横山操・加山又造展

2月15日(出)～3月23日(日)

横山操と加山又造は、ともに戦後、日本画が衰退の潮流に流されようとしている中、常に日本画壇の指針となる作品を発表してきました。本展ではそれぞれの画業を、1950年代から60年代にかけての作品を中心に紹介します。

## 常設展

(10月21日(月)～10月24日(木)、12月24日(火)～平成9年1月3日(金)、3月25日(火)～3月31日(月)は、保守点検のため休館します。)

### 第1期 ■4月2日(火)～7月14日(日)

前期：4月2日(火)～5月26日(日)  
後期：5月28日(火)～7月14日(日)

展示室1 新収蔵品を中心に(展示替えあり)

展示室2 新収蔵品、坂井コレクションを中心に

展示室3 前期：新収蔵 濱谷浩 後期：主張する素材

### 第2期 ■7月16日(火)～10月20日(日)

前期：7月16日(火)～9月1日(日)  
後期：9月3日(火)～10月20日(日)

展示室1 前期：日本画の逸品Ⅰ 後期：日本画の逸品Ⅱ

展示室2 大光コレクション

展示室3 前期：特集展示 デューラー 後期：ナビ派の版画

### 第3期 ■10月25日(金)～12月23日(月)

前期：10月25日(金)～11月24日(日)  
後期：11月26日(火)～12月23日(月)

展示室1 三輪晃勢・晃久

展示室2 '50年代の洋画

展示室3 前期：特集展示 田畑あきら子 後期：亀倉雄策Ⅲ '50年代再考

### 第4期 ■平成9年

1月4日(出)～3月23日(日)  
前期：1月4日(出)～2月16日(日)  
後期：2月18日(火)～3月23日(日)

展示室1 前期：横山操・加山又造の周辺Ⅰ 後期：横山操・加山又造の周辺Ⅱ

展示室2 '60年代の洋画

展示室3 前期：リヴィエールの版画 後期：深沢索一の版画と街の表情

## 新潟県民会館ギャラリーでの企画展

### ■平成8年3月1日(出)～3月20日(休) シリーズ新潟の美術 '97

#### ■表紙作品解説 土田麦僊 《芥子》



絹本軸装(部分) 1926(大正15)年 196.6×109.6cm

土田麦僊は大正10年に渡欧し、1年7ヵ月に及んで西欧名画の見学と海外研究に没頭しました。その成果は、高度な写実性と装飾性の融合という形で《舞妓林泉》や《大原女》などの作品の華やかな色彩と構成に表現されました。

この作品は上記の二作品の間に描かれたものです。葉の緑の微妙な蔭調、葉や茎の線が律動的な調和を作り出しながらも写生で得たものが直截に表されています。

この頃の麦僊は芥子への関心が高まり、大正14年春から尾張一宮で写生したのを始めとして、花の理い丹波や新潟や信州にまで出掛け、さらに自宅に気に入った花を咲かせるため各地から種を取り寄せたりもしたといえます。

寂寥感をともなう抑えた色彩と繊細な線、平明な構成による清澄な画面は、麦僊の晩年の精神的な深まりを見せる一連の作品の出発点になりました。

# 「自然と人との語らい」

## 野外彫刻が屋上庭園に

野外彫刻は、信濃川の雄大な景色を背景に緑豊かな樹林と芝生広場の明るく開放的な景観と四季折々で変化する美術館周辺に調和した彫刻群として県民に憩いとやすらぎを提供する。設置に当たっては周囲の環境の特性や変化に配慮した「新潟の野外彫刻」として、特徴を持たせ、かつ21世紀への遺産ともなる未来を指向したものにする。



新潟県立近代美術館の野外彫刻の設置計画は、上記のような全体構想の下で平成6年度から開始されましたが、このたび平成7年度第1期工事が終了しました。

第1期は、4つの作品が美術館後方の屋上庭園に設置されました。ここでは、信濃川を一望でき、また、信濃川からも美術館を望める立地条件であることから、自然と対峙した空間構成です。自然との調和を求めるとともに、重量感のある現代彫刻を設置することによって観覧する人に驚きと新鮮さを感じ取ってもらい、様々な想いを込めて語り合える広場となるよう作家を選出しました。

### 第1期 野外彫刻制作作家

#### ◆小清水 漸 〈空へ 信濃川から〉

ヴェネツィア・サンパウロ・パリビエンナーレ他海外展出品

#### ◆岡本 敦生 〈地殻一海〉

朝倉文夫賞・宇都宮市常盤公園毎日新聞社賞他国内・国外展出品

#### ◆中岡 慎太郎 〈FANTASY〉

長野市野外彫刻賞・頭彫刻大賞他国内・国外展出品

#### ◆前田 哲明 〈UNTITLED 95=0〉

安宅賞受賞他国内、国外展出品

## 友の会からのお知らせ

### ◎友の会 会員募集

新潟県立近代美術館友の会では、平成8年度の会員を募集中です。友の会は美術を愛する人が集まり、鑑賞会や研究会、会報発行などの活動を通じて親睦を深め、美術館を支援する団体です。

有効期間は平成8年4月1日から平成9年3月31日までです。入会しますと、常設展の無料観覧や企画展の無料観覧券の配布、図録やレストランの割引、会報等の配布や研修行事への参加などの特典があります。年会費は下記の通りです。照会や入会のお申し込みは、新潟県立近代美術館友の会事務局にお問い合わせください。〔TEL.0258-28-4111〕

### 年会費 (単位:円)

|                 |    |                 |
|-----------------|----|-----------------|
| 一般会員            | 一般 | 4,000円          |
|                 | 学生 | 2,000円          |
| ファミリー会員         |    | 10,000円         |
| 特別会員<br>(個人・法人) |    | 30,000円<br>(一口) |

### ◎平成8年度事業予定

- ・県内美術館巡り
- ・第3回友の会研修旅行〔国内〕  
(昨年度は常盤街道美術紀行でした)
- ・各企画展ごとの友の会鑑賞会
- ・美術館探訪  
(美術館の舞台裏を紹介します)
- ・各地区での美術講演会
- ・友の会たより発行 他

### 利用案内

- 開館時間/午前9時～午後5時
- 休館日/毎週月曜日  
ただし祝日・振替休日の場合は翌日が休館となります。  
※10月21日(月)～10月24日(木)、12月24日(火)～平成9年1月3日(金)、平成9年3月25日(火)～3月31日(月)は保守点検のため休館します。
- 観覧料金/企画展観覧料  
企画展によって観覧料が異なります。なお、同観覧料で、常設展もご覧いただけます。
- ・常設展観覧料  
一般……400円(320円)  
大学・高校生・200円(160円)  
中学・小学生・100円(80円)  
※( )内は20名以上の団体料金です。

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART  
**新潟県立近代美術館**  
 新潟県長岡市宮間町字居掛278-14 千940-21  
 TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

# 美術連話(6) 「近事片々」

新潟県立近代美術館長 前川 誠郎

寒い冬であった。文字通り老骨に冷え板の咲く夢をみたりした。また結構忙しくもあって連日殆ど書齋で過ごしたが、電気暖房がよくきかないので、腰を痛める原因ともなった。昨年十月中には終わっている筈のエルミタージュ展関係の資料が一向に揃わず、何回となく先方へファックスを送るなどという焦慮を、机に向かってものを書く間は忘れて終うのも皮肉なことであった。雪も解けかける三月に入ってエルミタージュ展開催のための手順も漸く整ったので、これから館を挙げてそのための準備に取り組むことになる。

そのような中で嬉しかったのは、今から丁度100年前の1896年と、77年前の1919年に夫々ドイツで刊行された西洋古版画の複製本を入手したことであった。一つはデ・バルバリ、他はデューラーに関する豪華本で、久しく名を聞きながら実物に接するのは今度が初めてであった。しかも日本の古書店を通じて思い掛けなくも購入できたのである。当時はすでに写真製版の技術が開発され、それに基づいて亜鉛版や銅版を作って一つ一つ手刷りで複製しているので実に迫力がある。本物と間違おうといけないので裏面にはスタンプを押すという念の入れ方である。デ・バルバリの木版画《ヴェネツィア鳥獣園》は余りに大きいのでそれを二分の一に縮尺してある他はすべて原寸である。とてもオリジナルを買うことのできない私にはこれらの複製本は実に有難い。解説がクリステラーとかフリードレンダーと言った当時の大学者によって為されているのも満足感を高めてくれる。そう言った訳で私は大いに楽んだ。尤も値段も少々張って二冊で十三万円ほどであった。

一昨年度に引き続き当館では古版画のオリジナルとしてデューラーの木版画《ファルンビューラーの肖像》を昨年度収集することができた。これはデューラー晩年の大判木版画の傑作であるが、購入したものは画家の没後百年近く経ってその木版を入手したオランダの版画家が色板を二枚足して仕上げたキアロスクーロ、即ち色刷り木版画である。古来版画界の大名物として本来の単色刷りのものよりも遥かに高い値で市場で取引きされて来た。保存状態も完璧であり、透かしてみるとウォーターマークもはっきりしている。

色刷り木版画の技術的極致はわが錦絵即ち浮世絵版画であり、精々数枚の色板しか使わないキアロスクーロとは同日の談ではないが、しかし紙の白地を残してハイライトとして使う技法は浮世絵には見られない。矢張り西洋は写実の世界であることを思わせる作例である。

昨年度末には久しぶりに当館の学芸紀要が出た。新潟市に在った時代から算るともう三十年近い歴史をもちながら、これまで二冊しか紀要が作られていない。それには色々な理由があったが、今後は毎年度末に出していきたいと念願している。私も能う限り何かを書きたいと

思い、今度は「日本の仏教と神道」を載せてもらったが、ドイツ語で書いているのは昨年十月に東京で外国の学者たちを相手に行った講演の草稿だからである。私は当館に着任したころから日本美術史または文化史に大きな関心を抱くようになり、西洋美術史家の視点から見た私見を機会のある毎に書き綴って来た。何れ小さな本に纏めることができれば老来何よりの愉しみである。

冬のレコードコンサートも三年目を迎えた。鐘詰めのクラシック音楽に興味を持つようになってすでに六十年、美術史よりも十年は年が入っている。素より道楽であるが、同好の士はどこにでもあるもので、冬の四ヶ月だけの私のコンサートにも固定のファンができて来たのは実に嬉しいことである。しかし今期は余りに忙しいので選曲や解説もついお粗末になって申し訳なく思っている。私は何と言ってもSP時代の録音の再刻盤を懐しむものであるが、LP初期の名盤にもまた棄て難い愛着を覚える。そして勿論最近の新録も結構となると、結局レコードなら何でも良いと言うに等しいが、一、二度掛けてそのまま忘れて了うものと、何度でも繰返して聴き込むものとの差が歴然として存在するのは不思議な程である。いま一番気になるのは、例えばベートーヴェンとシェーンベルクを一人の人間が本当にどちらも心から愉むことができるのであろうかという大変素朴な疑問である。似たことは美術の世界にも当然ある。もし出来るとすれば人間とはそれ程にも寛容な生物なのであろうか。それが可能であるというなら、その時の我々の判断には感性よりも多分に知性が入っているのではあるまいか。



アルブレヒト・デューラー（ウルリッヒ・ファルンビューラーの肖像）  
1522年（1620年頃の刷り）木版画、キアロスクーロ